

第Ⅶ章 まとめにかえて

第1節 城門構築の一過程について

1、はじめに

鬼ノ城では平成6年度に実施した東門の発掘調査を皮切りに西門、南門、北門が相次いで発見され、各門が残存良好な状態で検出された事が幸いし、相互に比較検討が可能になった。特に西門は史跡整備に伴う発掘調査により、城門の地下構造や版築土塁との築造方法が把握できるなど、工程順序にも迫れる内容を持ち、多大な成果を得ることができた。そのため、他の城門で漠然と考えていた遺構の解釈を一層深化させることが可能で、知られざる属性も新たに浮上するなど、貴重な情報源になっている。

こうした西門の成果をもとに城門を比較すれば、各城門が掘立柱建物であることや、門道床面に門礎を初めとする石敷が構成されていること。あるいは、懸門（西門を除く）を採用していることなどいくつかの共通する要素が指摘できる。そうした一方で、規模や構造の相異や各所の地形に相応した各城門のもつ独自性もまたその様相が明確になってきたと言える。これらを整理し多角的な視野から考察すれば鬼ノ城のなかでの各城門の位置付けや、役割が解明できるものと期待される。

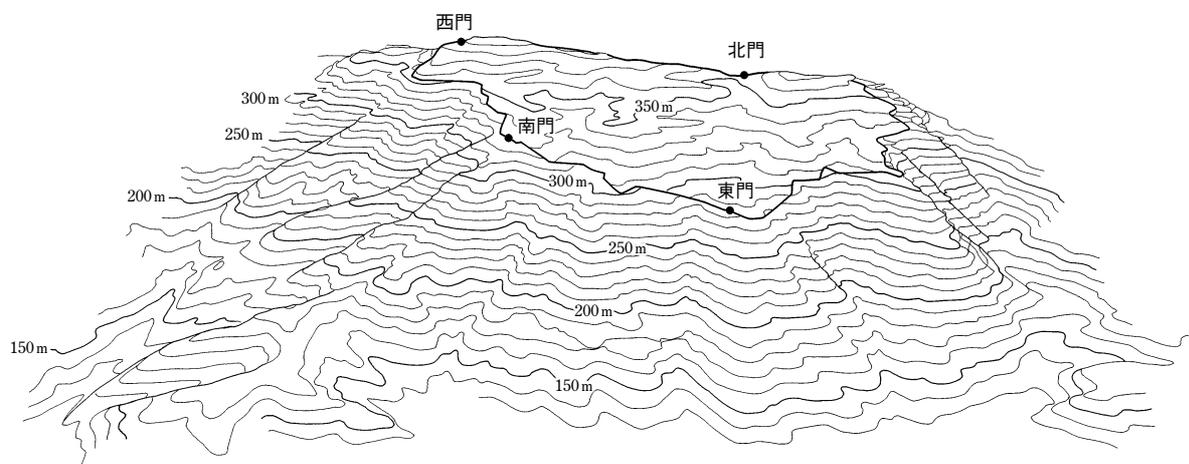
さて、4カ所の城門の中でも東門は最小規模であるが、選地形態や城門の構造自体も他の門に劣らぬ防御上の工夫が凝らされている。また防御の補完という観点からは西門が角楼により防御力を向上させているのと同様に、東門の場合は2カ所の突出部と連携していると考えている。

本稿では東門を中心に城門の基礎資料に重きを置いて、門道や門礎を考察することとし、その結果を基に他の古代山城の城門門礎にも言及してみたい。

2、各城門の特徴

(1) 東門と突出部の防御機能

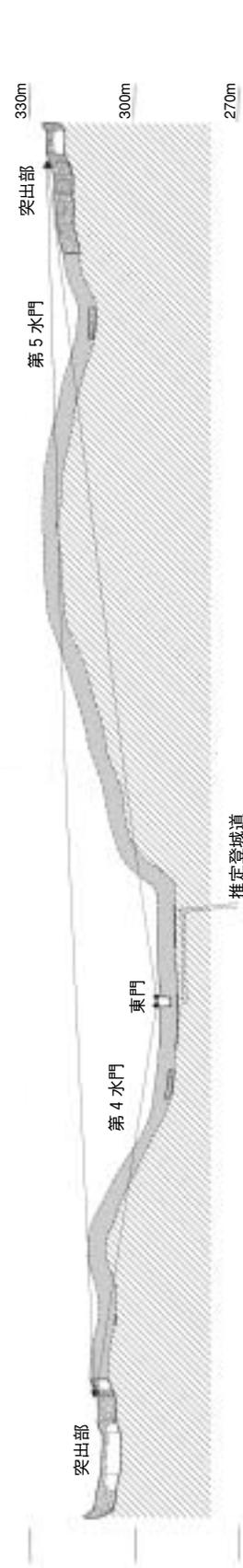
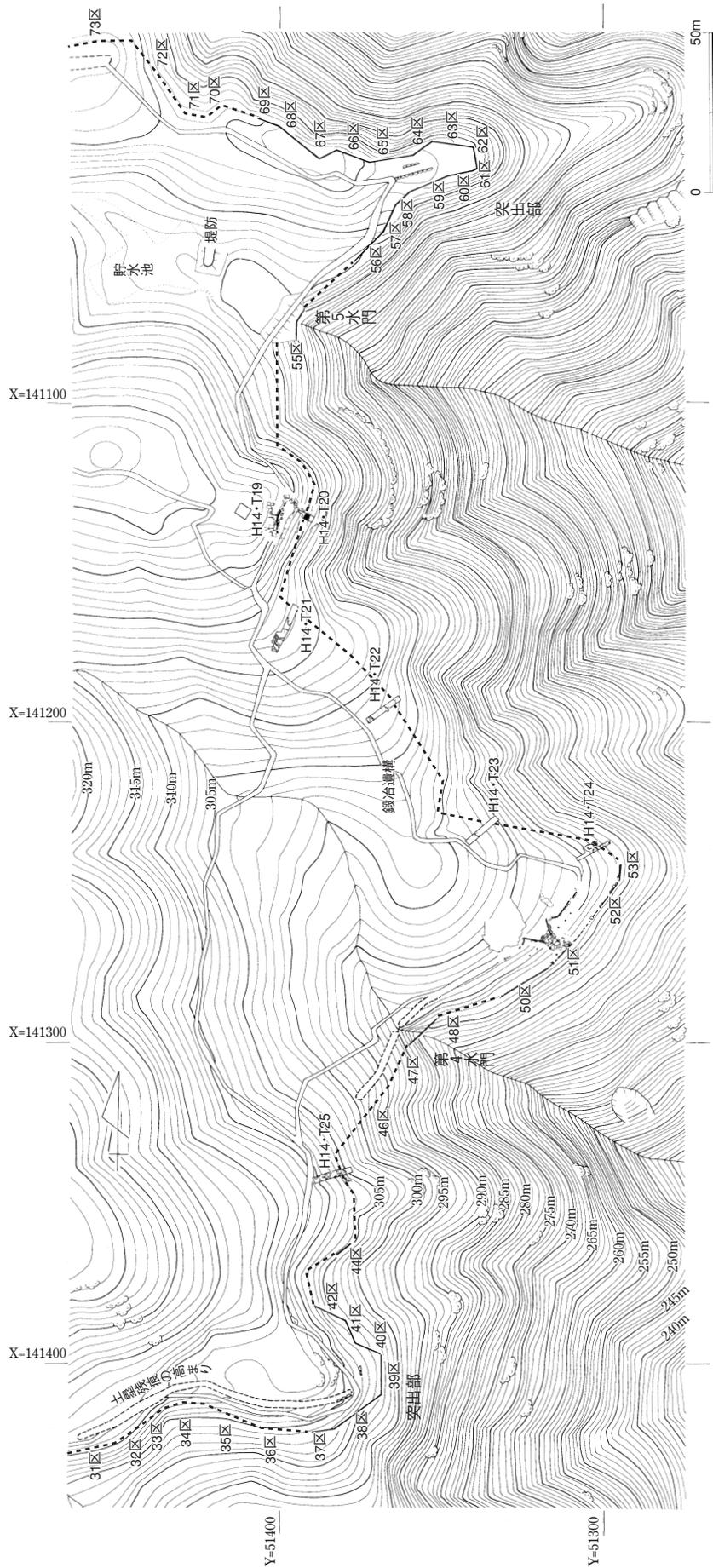
東門は鬼ノ城の南東部に位置し、各城門の中で標高が最も低い位置に築造されている。低位置とは



『史跡鬼城山（鬼ノ城）環境整備
基本計画書』総社市教育委員会、
平成13年より引用、再トレース

東方から見た鬼ノ城

第34図 鬼ノ城俯瞰図



城壁線はあくまでも推測による

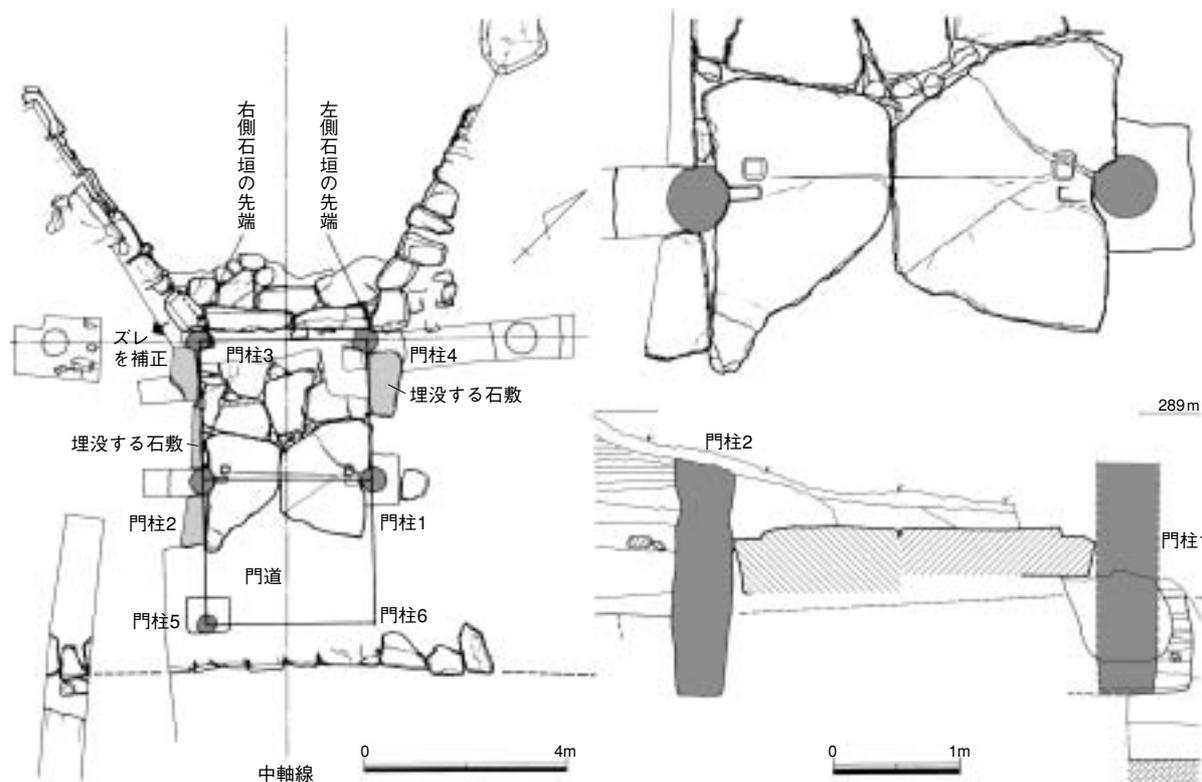
推定登城道
立面模式図

第35図 東門と突出部の可視性 (S=1/2000)

言え眺望は、総社平野から「吉備の穴海」と称された瀬戸内海の入江を望むことができ、西門や南門と同様にすこぶる視界が開けている。正面には奥坂遺跡群が所在する低丘陵が北から南へと派生し、鬼城山を始め吉備高原南端部の山塊との間に、狭隘な谷底平野が存在する。総社平野から東門へ至るには、水城状遺構を通過して谷部をさらに北へ進まなければならない、東門からの眺望とは裏腹に平野からかなり奥まった位置に登城道の入口が想定される。

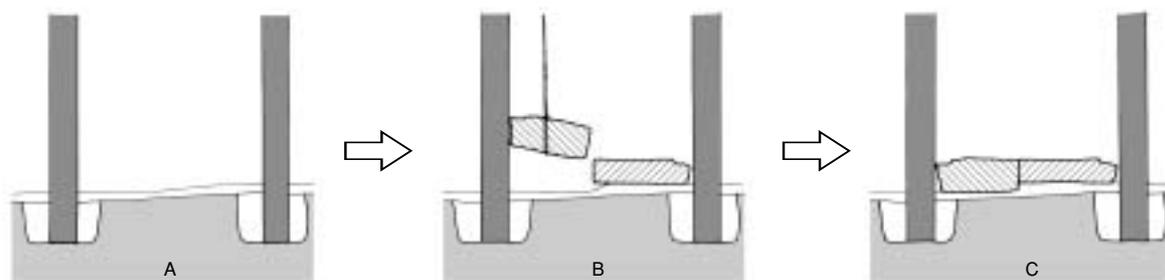
東門から山麓の阿弥陀原集落へは現在、尾根の稜線を利用して登山道が通じており、この尾根線は極めて直線的で、山麓から東門までの登りは35分程度で到達できる。また、尾根稜線と城門との位置関係や周辺地形からみても、古代山城の登城道の一部踏襲している可能性があり、城域の中で最低点に位置することを加味すれば時間、距離ともに最短で城内へ至る利便性を兼ね備えている。

しかし、尾根稜線との交点にあたる城壁線は第53罫状区間であり、東門とは約30mも位置がズレているため、必ずしも城門と推定登城道は直結していない。そのため、仮に推定登城道から東門に接近しようとするれば西へ屈折して入城を試みなければならない、向井一雄氏により推定登城道からの直進を故意に避けた防御効果が指摘されている⁽¹⁾。



第36図 東門の建物と床石敷きの関係 (S=1/150)

第37図 門礎と門柱の関係 (S=1/60)



第38図 門礎の設置方法模式図

次に東門からの可視性に注目すれば、南側と北側に2カ所の突出部を望むことができ、しかも東門よりも高所に構築されていることから、立面的にみると東門と各突出部は相互にトライアングルを結んだ位置関係にたとえられる。一方、東門から推定登城道の可視性は、山麓までを見通すことができるものの、尾根線を完全に掌握できず死角になる所もあり、こうした欠点を補うかのように、2箇所突出部からは東門と推定登城道を側方から視界に収めることができる。つまり、常に人員や物資の搬出入といった動向をうかがうことが可能で、突出部自体も互いに目視することができるため、必然的に城門への監視機能を具備していると言えるだろう。

また、城外へ大きく張り出した突出部は、通常区間の版築土塁と連続しつつも独立した空間であり、床面積は南側の突出部が530㎡以上、北側の突出部（通称屏風折れの石垣）は350㎡と広く、兵力集中を促す防御拠点でもある。城壁線を守城側からみた動線としての視点に立てば、ここでもトライアングルの関係は作用し、各突出部から東門への城壁線は下り勾配になるため、わずかな時間と早さで移動できることも東門の防御を高める潜在的な一面と考えられる。

（2）東門の門道

東門の発掘調査では、城門構築の設計上の問題として、外側列石の中央を基点に直交するラインが中軸線として復元でき、構造面では門柱の根入れと地山との関係。そして、門礎や石敷の配置にも観察を深めることができた。また、門道の壁面には板壁を設置していたことが判明し、これらの発掘調査成果に基づき築造過程を整理すれば以下ようになる。

- ①城門の築造予定地（第51壘状区間）における基礎地形と造成を実施したと推測される。
- ②外側列石の配列と共に、列石の中央を中軸線に設定し、城門構築の基準とする。（根拠は報告文にて記述）
- ③外側列石の前面には堰板と支柱により版築用の型枠を形成し、版築盛土を行う。
門柱1・2・4によれば外側列石の上端から高さ1.6～2.2mの位置で掘形を穿っている。
- ④門柱1・2によれば立柱後、整地を行い門礎や床石が配置される。
- ⑤桁行方向に板壁が設置されると共に、ハ字形石垣が構築され建築作業が本格化する。

各城門の構築過程を整理しそれぞれを比較検討すれば、単に平面形状や細部での比較のみに終始することなく、構造面でも新たな知見が得られると思われる。こうした基礎作業の一つとして、今回は④の工程について述べてみたい。

門柱1と門柱2の間に配置された門礎は2石で構成され、極めて水平に配置されている。門礎の加工は刳形や開閉装置のみならず、門礎の接合面にも及び両側面も桁行方向に向かって直線的である。門道を形成するには門柱を立てた後に門礎が設置されるため、技術的に困難を伴うことは必至であり、いかにして設置されたのか疑問に思われる。

そこで第37図の門礎と門柱の關係に着目してみたい。門柱1は柱痕の上部が崩れているが、底部付近の形状が遺存しているため、これを基に復元すれば門柱1・2とも門礎に接していることが判る。

次に円形刳形の断面は左側門礎が約8°内傾し、右側門礎も約11°内傾しており、刳形の上端よりも地中に埋没する下端の方が径が大きいと推定できる。つまり、門礎は刳形の傾きを利用しつつ門柱へ添わせ、相互に密着させていると考えられるのである。

以下に配置方法（第38図）を復元してみると、

- ・ 模式図Aでは版築盛土を穿ち、門柱1と門柱2が立てられる。
- ・ 模式図Bでは左右いずれかの門礎をまず設置する。⁽²⁾もう片方の門礎は上部から吊り下げ、円形刳形の傾きを門柱に添わせつつ徐々に降下させる。
- ・ 模式図Cでは門礎の接合面と水平を調整して配置する。

このような経過を経て門礎の配置後に方立、軸摺穴、蹴放しの加工が施されたと考えられ、特に蹴放しは最高5cmの段となるよう平滑に加工しており、この下段に合わせて城内側の床石が配置されている。一方、門礎よりも城外側の石敷は崩落のため原形を留めていないが、他の城門の例にもれず蹴放しの上段に合わせて配置されたと推定すべきであろう。

次に門道石敷の配置方法を検討してみると、門礎の両側面を始めとし建物の桁行方向に合わせて石敷の目地が揃っている事がわかる。門柱3から門柱2の間には、壁面下に埋没する石敷の端部に板壁痕跡を検出しており、板壁の位置と石敷の目地が合致している。

門道の壁面は板壁で構成され門柱3、門柱4に接してハ字形石垣の先端部も、壁面の方向に面をもたせていた。つまり、門柱と接する築石には石面が2面あり、一面が石垣と面を合わせているにも関わらず、柱と接する部分は板壁と面を合わせているのである。この面の規模は左側石垣が高さ17cm・幅30cmを測り、右側石垣は高さ25cm・幅20cmである。

門道の両壁は板壁から門柱3・4を経て石垣へと移行しており、築石に2面をもたせる事により、門柱と石垣の間隙を極力排除する細やかな配慮と考えられ、築石を入念に吟味したか、あるいはこの部分のみ割って面を形成したものと推察される。

(3) 北門

北門は鬼城山の北東部に位置し、正面には犬墓山（標高443m）を始め吉備高原の山並みが遠望できる。谷部に構築されているため北門の左右に展開する城壁線は、必然的に扇を広げた形状を呈し、いわゆる味方折れを形成している。

北門の主軸は東西方向を指し、軸線と直交するようにして北側の城壁が築造されている事から城門との一体性がうかがえるのに対して、南側の城壁は直交軸よりも約16°西に振り、通常区間へと連続している。北門の規模を未検出の柱穴を含めて推測すれば間口1間（4m）×奥行3間（9.6m）と考えられ、柱は本柱に角柱を使用し他に丸柱を使用した掘立柱建物である。門道の床面は全て石敷で、本柱間には門礎が配置されコ字形刳形、方立、軸摺穴、蹴放しのセットが加工されており、門道の中央部分に石組みの排水溝が併設されていた。また、門道の両側には桁行方向に添って幅6mを測る城門構築用の掘形を検出した事が注目される。⁽³⁾

門礎は4石で構成されているが、左側門礎を除いてズレや攪乱を受けている。そのため、まず左側門礎と門柱2の関係を述べたい。

門柱2は1辺約50cmの角柱を使用し、門礎の上端から深さ2.16mが埋没していた。底部は地山に達しており、排水溝付近で検出された地山との比高差は158cmを測り、少なくともこの間は柱掘形の掘削時に掘り下げられたと考えられる。第40図によれば門柱2にコ字形刳形が添わせられ、断面はほぼ直角に加工されていることがわかる。

門礎を構成する3石が原位置からズレているため接合面の状況が観察でき、いずれの石材も側面を直線的に加工し、特に右側門礎では顕著である。精緻な加工の反面、左側門礎の段上には未加工部分の削り残しが65×75cmの範囲で残されていた。

また、右側門礎の軸摺穴は底部が2段となっており、軸摺穴の加工中、位置を4cm北へずらせたと解釈でき、門礎の配置後に方立、蹴放し、軸摺穴を加工した傍証となる事例である。

次に門道石敷の配置に注目すれば左側門礎の側面は直線的で、門柱1～門柱3の石材は目地が揃い、門柱2～門柱3には壁面の痕跡を検出しているため、桁行方向に門道石敷の目地と壁面の位置関係が合致している。対する右側門礎から門柱7までにも桁行方向に目地を揃えた石材が2石認められ、壁面の位置を示すものと考えられる。

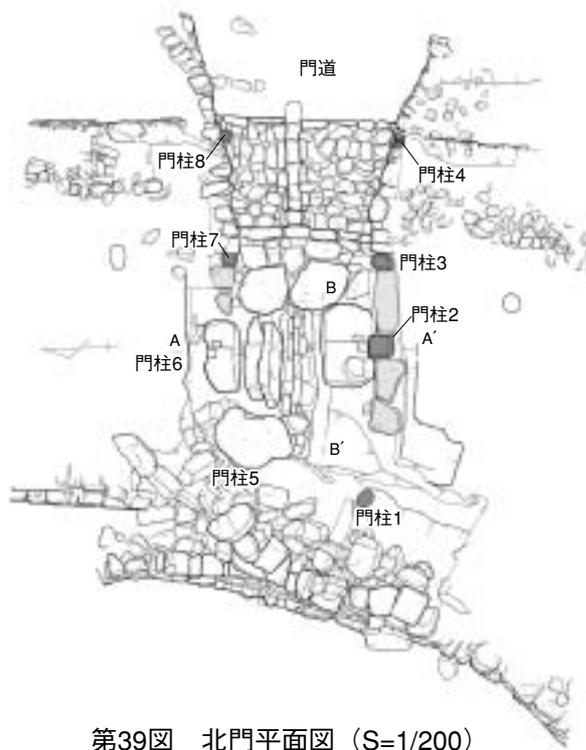
後世に倒立させられた門礎の一部は不幸にも攪乱を被ったが、その反面、左側門礎より下位の断面観察の機会に恵まれた。それによると削平された地山上にA層、B層、C層の順で盛土後に門礎が配置されたことがわかる。

A層は水平方向に突き固められた版築層で硬質に突き固められ、層厚が薄くB層、C層とは明瞭な層境が認められる。A層の盛土後、B層が版築されておりその途中で排水溝の掘削面が存在している(地山から高さ約25～30cmの位置)。そして、門礎の直下にはA層からB層にかけて幅210cm、深30cmの範囲で掘り込まれた痕跡があり、埋土となるC層の強度はA・B層よりもやや軟質であった。

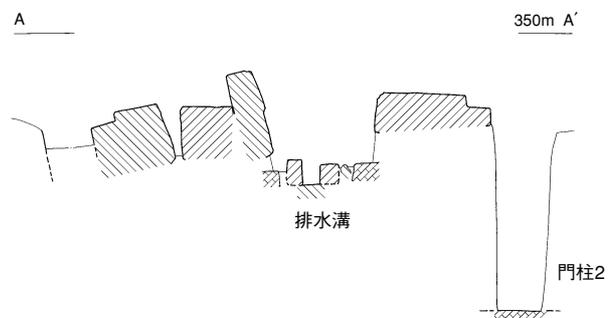
こうした築造順序が整理できるのであるが、門礎の配置と直接関係あるのは門礎直下のC層である。その理由としてA・B層とC層では土質の強度に相異があり、門礎を配置する際の微調整にC層を緩衝材として埋置させた可能性を指摘しておきたい。

(4) 南門

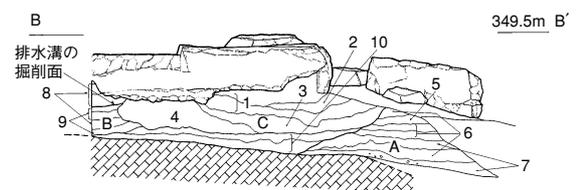
南門は鬼城山の南部に位置し、眼下には総社平野を収め広範囲に視界が開ける。城門は谷頭に築造



第39図 北門平面図 (S=1/200)



第40図 門礎と柱2の関係 (S=1/80)



第41図 門礎の設置痕跡 (S=1/60)

- | | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 1、にぶい橙色粗砂 (7.5YR6/4)、中、真砂土多 | 6、にぶい黄褐色細砂 (10YR5/3)、硬 |
| 2、にぶい黄褐色細砂 (10YR6/3)、やや硬 | 7、5と同じ |
| 3、 | 8、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)、やや硬、白色粒、褐色粒多 |
| 4、1と同じ | 9、5と同じ |
| 5、にぶい黄褐色細砂 (10YR6/3)、硬、白色ブロック多 | 10、にぶい黄褐色細砂 (10YR6/3)、中 |

されているため、城外側は非常に急峻な斜面となり、南門から連続する城壁の両方向には約25m離れて尾根が張り出し、いずれも先端部が急激に下降している。

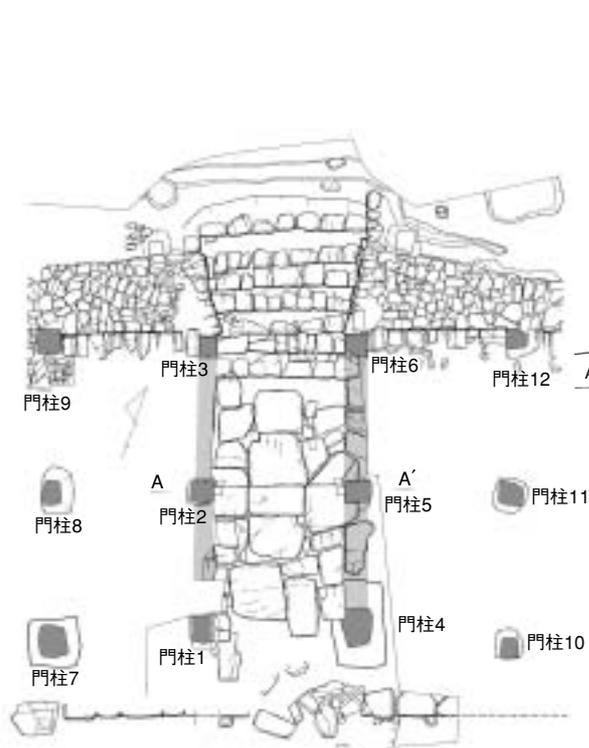
吉備高原と絶縁する傾斜変換線には、地形を巧みに利用して城壁が築かれ、南門から接続する城壁は両方向共に内折しているため、巨視的に見れば城門全体が張り出したように見える。

南門は正面3間(12.3m)×奥行2間(7.55~8.1m)の掘立柱建物で、門柱には一辺55cm前後の角柱が用いられている。12本ある門柱のうち10本分の根入れを確認しており、残存良好な門柱2では土塁の上面から深さ4.2mが埋没し、門柱3では高さ4.6mが復元できる。また、各柱痕の底部は全て地山(花崗岩風化土)に達していることから、強固な支持層の上に城門が建設されたと考えられ、一様に揃う地山の高さは大規模な地山の削平さえうかがわせる。

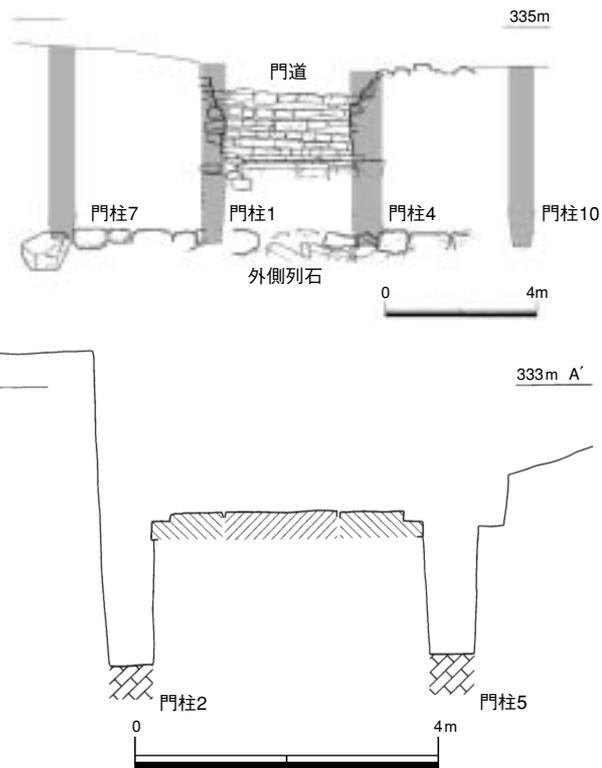
南門の平面形状は門柱7・1・4・10の桁が直線的に通らず、門柱1・4が城内側に入り込んでいる点や、内側石垣が版築盛土内に最深で2.3mも埋没させている点などいくつかの共通点を挙げれば、西門と規模や形状は合致し、石段の段数や門道内部の石垣形状などの細部を除けば基本構造も一致している。

門礎は4石で構成され、蹴放しを構成する中央の石材は2石を接合させて約8cmの段差を設けている。この門礎には用途不明ながら軸摺穴から造り出しが刻出されており、左側門礎は直線、右側門礎は曲線に加工され西門とは対称形になっていることが村上幸雄氏により指摘されている。

さて、門柱2、5と門礎の関係を示した第43図によればコ字形剝形と門礎が添わされており、コ字形剝形の断面は門礎の上端に対して直角に加工されていた。また、門道石敷は門柱4-5-6の梁方向へ目地が揃い、対する門柱1-2-3側も壁面下に検出された石敷きの状況からやはり目地が揃っていると見るべきであろう。この目地に添って門柱2から門柱3間にはスサや木炭粒そして、鉄分を



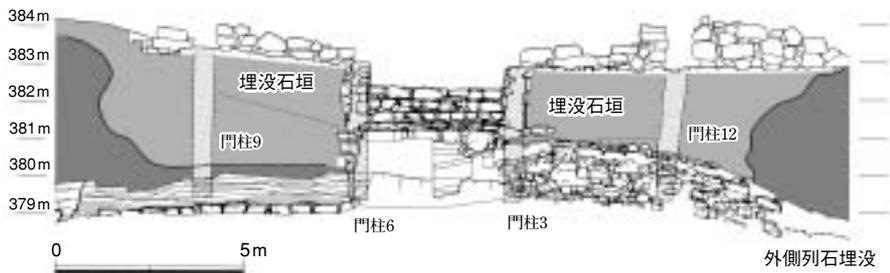
第42図 南門平面・立面図 (S=1/200)



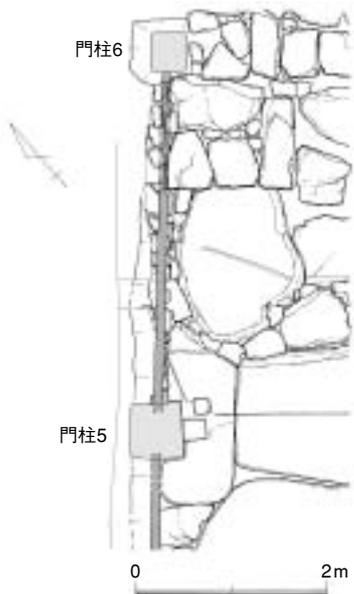
第43図 門礎と門柱の関係 (S=1/100)



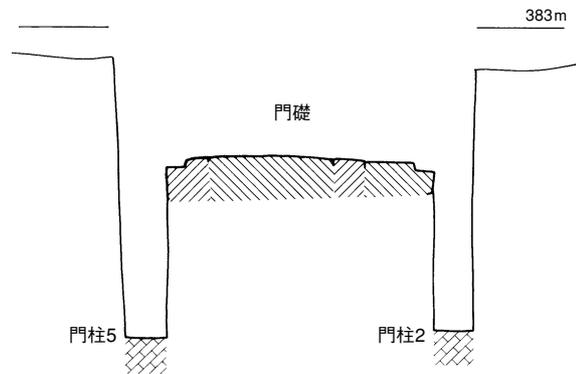
第44図 西門平面図 (S=1/200)



第45図 西門立面合成図 (S=1/200)



第46図 板壁痕跡と地覆石 (S=1/80)



第47図 門礎と門柱の関係 (S=1/100)

含有する橙色系土が検出され、門道の壁面が土壁であった可能性が指摘されており、ここでも石敷の目地と壁面との位置関係に整合性が認められる。

(5) 西門

鬼城山の南西部に位置する西門は各門の中で最も標高が高く、西門からは広範囲に視界が開け、正面には遠く水島灘から笠岡諸島に至る瀬戸内海が一望できる。

南西部の城壁線を巨視的に見れば、角楼から北門に向けて築造された鬼ノ城の背面側を構成する城壁線と、防御正面の総社平野側に築造された城壁線との結節点であり、当該箇所は「く」字形に大きく内折している。この折れとなる箇所に角楼を築き、約60m離れた南側には巨大な西門を築造して防御機能を補完・充実させている。西門は鬼城山山頂から南西方向に地形が大きく張り出した傾斜変換線に築かれているため視界が大きく広がり、城外側からも視覚的に強いインパクトを与えている点はさきの南門と同じである。

また、西門の城外側には豎堀状溝が城門から前面の尾根の鞍部に向けて長さ30m、幅5～8mにわたり確認できる。この遺構を敵兵の横移動を阻害する豎堀的な機能を想定するか、あるいは登城道跡と解釈するか意見の分かれるところであるが、ともかくも鬼ノ城と付随する遺構であることには疑いない。

西門は正面3間(12m)×奥行2間(8.3m)の掘立柱建物で、門柱には一辺50～60cmの角柱を使用し史跡整備に伴い全ての柱痕を完掘している。その結果、西門の地下構造に地山をL字形に削平した大規模な基礎地形が推測されることや、全ての門柱が地山直上に立てられ強固な支持層により建物の過重を受けていることが判明した。そして、城門の築造に伴う大規模な掘形(上面幅20.5m、底部幅16m)を検出し、城門の建設と左右の城壁の築造とが一体不可分の工程のなかに組み込まれ、築造順序も予想されるようになった。また、他の城門が懸門式と推定されるのに対し、西門は構造的に共通しながらも門道の前面にスロープを採用しており、いわば懸門の機能を故意に喪失させている点で、他の城門とは異質であり役割が異なるようである。

さて、西門の門道は石敷が完存しており、内部の壁面についても重要な情報が得られた。門礎は4石で構成されており、門柱と門礎の関係を示した第47図によれば、門柱に門礎が添わされていることがわかる。⁽⁴⁾コ字形剝形の断面は左側門礎が5°内傾し、右側門礎も3～5°内傾しているが、いずれも微少な傾きに留まっている。壁面は門柱4－5－6間で板壁痕跡を長さ約7mにわたり検出し、残存高1.2m、厚さ約6cmを測る板壁痕跡が崩壊の過程の中で土圧に押され、門道内へ傾いた状態で検出された。門柱5－6間には板壁痕跡の基底に、小形石材をL字形になるよう組み合わせた地覆が形成されているなど、壁面の状態が如実に把握できる好例と言えよう。

門道石敷の配置は門柱4－5間で門道内へ目地を揃え、壁面下に埋没する石材を検出した。しかし、門柱1－2－3間の石敷は門道と壁面下に埋没する石敷との組み合わせが不明瞭で、門柱1－2間では門道の大形石材が壁面下に埋没しており、これらは両方の役割を兼ねた石材と認識している。

(6) 小結

これまでみてきた門礎と門道石敷の基礎事項を簡略に整理しておきたい。

城門は全て掘立柱建物であり、共通する築造順序として門柱を立てた後に門道へ床石が配置されている。その際、門礎に加工された蹴放しに段差が生じ、上段と下段に高さを合わせて床石が配置されていることから、まず最初に配置されたのが門礎と考えられる。

門礎の配置方法として東門の場合は門礎が2石で構成されており、円形刳形の断面が著しく内傾していたため、まず片方の門礎を配置し、もう片方の門礎は刳形断面の傾きを利用して降下させ、隣石と密着するよう調整しながら配置したと考えた。

一方、西門・北門・南門のように門礎が3～4石で構成される場合は、コ字形刳形の断面形状は直角かわずかに内傾しているのみで、まず両側の柱に刳形を施した門礎をあてがい、次に中間の石材を調整して配置している。つまり、門礎を構成する石材数と、隣石との接合面となる側面加工、それに伴う接合時の密着、そして刳形断面の傾きは互いに関連があり、東門の場合は配置上の要請から生まれた属性と判断できる⁽⁴⁾。

門道石敷の配置状況からは門道部分と壁面下に埋没する石材があり、これらの境には目地が通り配置時にはすでに区別されていた事がわかる。そればかりか東門や北門の門礎は側面がこの目地とそろうため、門礎となる石材の選択時にはすでに意識されていたと考えるべきであろう。

石敷の配置後、門道内部には壁面が構成されるのであるが、板壁痕跡の位置と石敷の目地とは見事に一致しており、石敷の配置の際に門道の幅と、壁面の位置はすでに決定されていた事を示している。

3、他の古代山城

日本の古代山城では城門にコ字形刳形を施した門礎を使用している山城が、鬼ノ城を含めて4カ所存在する。播磨^{まのやま}・城山城、讃岐^{きやま}・城山城、周防^{いわきさん}・石城山城がそれであり、瀬戸内海を挟んだ山陽側と四国側に分布している。

瀬戸内海沿岸と九州地方の山城とは山城の選地や、城壁の取り巻きかたが異なり、坪井清足氏により九州型と瀬戸内型とに分類されてから久しく、分布論や編年研究が行われる際には両者を分けて整理する傾向があるのは、衆目の一致するところであろう。

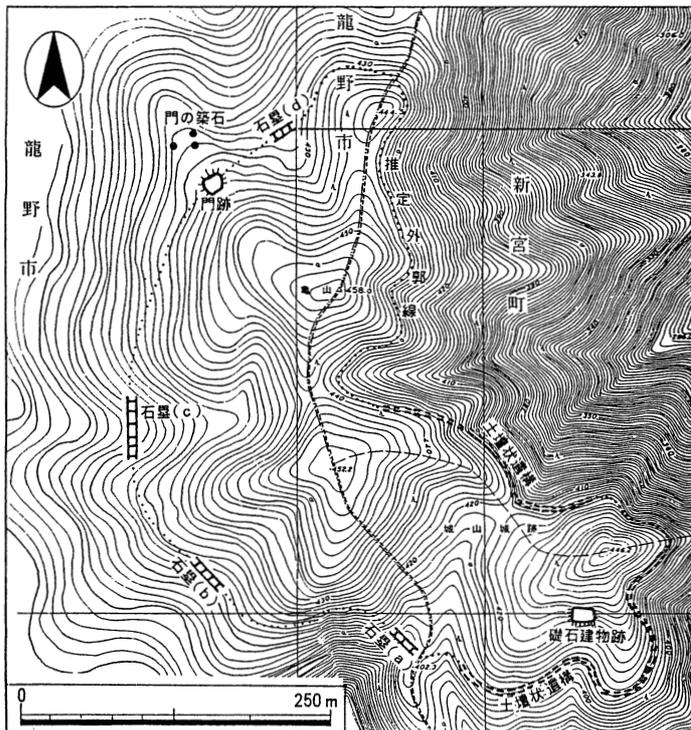
これらの各山城は遠距離にも関わらず地域を越え、今のところ城門の門礎に共通点が認知されており、一地方に留まらない技術の共有や、存在意義、そして、時代性に至るまで瀬戸内海沿岸の古代山城解明の糸口を内包しているものと思われる。

そのため、これまで見てきた鬼ノ城の門道や門礎の特徴をもとに、3カ所の山城の門礎を見てゆきたい。

(1) 播磨⁽⁵⁾ 城山城

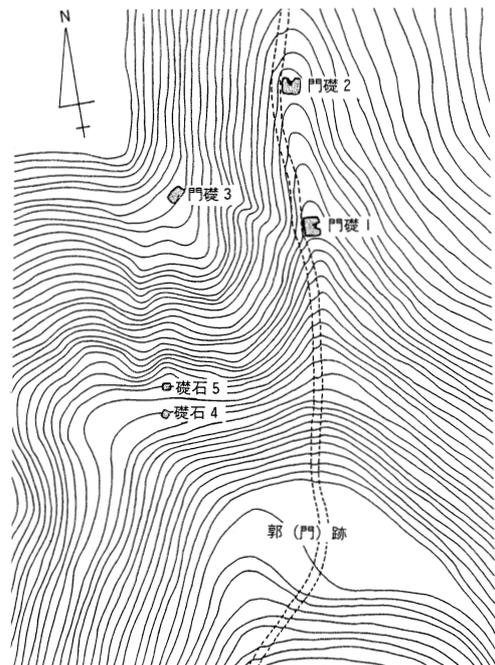
城山城は兵庫県揖保郡旧新宮町と龍野市の境界に位置し、令制下では播磨国揖保郡に属する。城山城からは揖保川中・下流域を形成する平野側と相生市側に開け播磨灘を望むことができ、揖保川河口から播磨の要港室津までも近い。また、「亀山」から南へ尾根続きとなる的場山の山麓には古代山陽道が東西方向に横断していたと推定され、城山城から直線距離にして約4kmである。一方、城山城東麓には播磨国草上⁽⁶⁾駅から分岐した美作支路が南北方向に通じ、約1.5kmと指呼の間に見通すことができるばかりか、『延喜式』記載の越部駅家比定地とも近接し、まさに交通の要衝に位置していると言える。

1982年以来、新宮町教育委員会を始め地元関係者や研究者の真摯な努力と、地道な踏査により遺跡が発見され、概要が把握されている。それによれば最高点の「亀山」(458m)と連続する3カ所の山頂部を取り囲むように城壁が構築され、全長は約1.6kmと推測されている。現在認知されている城壁の種別は谷部に4カ所の石塁が発見されており、城域の南東部を中心に土壇状遺構と称される内托式

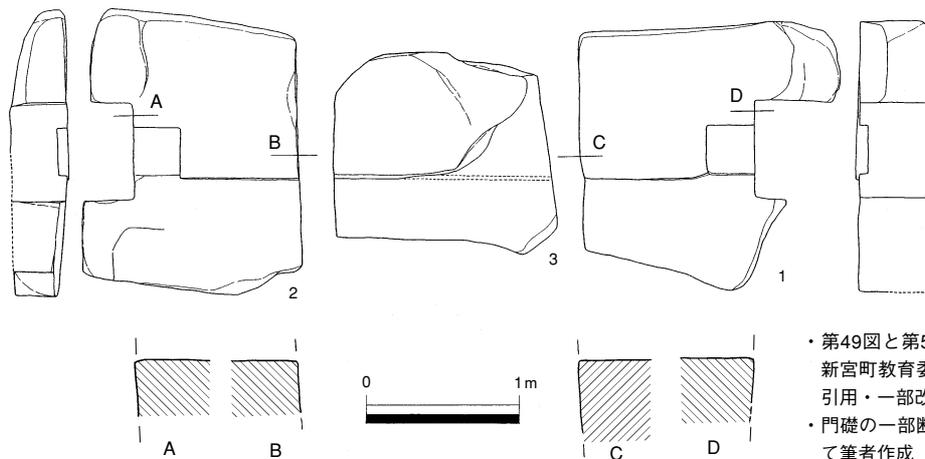


第48図 古代城山城概念図

加藤史郎「播磨・城山」『古代文化』第47巻第11号より引用



第49図 門礎付近の地形 (S=1/500)



第50図 門礎平・立・断面図 (S=1/50)

・第49図と第50図は「城山城」新宮町教育委員会、1988より引用・一部改変
 ・門礎の一部断面図は許可を得て筆者作成

の土塁が観察される⁽⁷⁾。

また、城門関連の遺構として亀山山頂から北西方向へ派生する尾根の稜線上と、その西側斜面に城門関連の石製遺物が5石散在しており、これらの石材は明らかに城門の存在を示し、転落・移動した現況から察して、当該地から上方に位置する平坦面(20×8m)との関係が指摘されている。

門礎を構成する石材は3石が周知されており、うち2石にコ字形刳形と、方立、蹴放しが加工されている。門礎は情報量が多いため、報告書『城山城』との重複を恐れず観察結果を以下にまとめておきたい。

門礎1、2の加工は刳形のある側面を除き3方に加工が施され(一部割れ有)、特に接合面が直線的になるよう入念に加工されている⁽⁸⁾。コ字形刳形の断面は門礎の上端に対して約4~6°内傾し、門礎2は約5°傾いていた。

門礎3は蹴放しの加工が施され、現在その一部が剥離している。門礎1、2との接合面と、門扉より城内側の側面には加工が施されたと観察され、しかも「城門推定復元図」によれば門礎2と門礎3は添いを合わせ、接合時の蹴放しの位置と一致することから配置時の位置関係は間違いないであろう。

これらの観察によれば城門は掘立柱建物と推定され、門柱に一边60cm近くもある角柱を使用しつつ、深い根入れを想定させる。発掘調査を経ていないため詳細は未解明であるが、門礎の形態から立柱後、門礎を配置したと考えられ、3石以上の石材を用いて構成された事は確実であり、隣石との密着を企図して接合面が直線的になるよう特に入念に加工していた。また、門礎のコ字形断面は内傾しつつも微少な傾きに留まっている。

さらに付言すれば、門礎の接合面のみならず城内側と城外側の側面に加工が施されていることは、他の石材との組み合わせを示唆するものであり、門道床面が石敷であった可能性も残されている。

(2) 周防 石城山城

石城山城は山口県光市に所在する。令制下では周防国熊毛郡に属するが、養老5年(721)には同郡から玖珂郡が分立している。石城山城からは周防灘を見通し室積の泊とも近く、瀬戸内海へ突き出した熊毛半島を望むことができる。眼下には現在陸化しているが、周防灘から安芸灘へと抜ける古柳井水道を収め直線距離にして約6kmで海岸線に達する。一方、駅路は山陽道が石国駅から野口・周防・生屋の駅にかけて山間部を抜け、石城山城から北方約9km付近を通り、周防駅比定地が最も近いと考えられる。

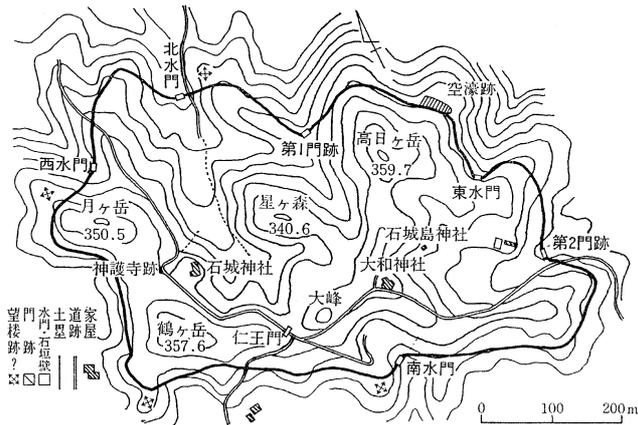
石城山は高日ヶ岳(標高359.7m)を最高所とする六峰を含む独立山で、揺り鉢を伏せたような山容を呈し、頂部は比較的なだらかな準平原となっている。山頂部の北東に位置する築山から鶴ヶ峯、大峯を経て南西側に至る尾根線は山塊の脊梁をなし、尾根のほぼ中央となる大峯から北東方向には最高所である高日ヶ岳に連なる尾根が派生している。こうした山容の8合目付近に城壁が構築され、全長は約2.5kmを測る。

山口県教育委員会は昭和38・39年に文化庁および旧大和村と共同して石城山城の発掘調査を実施し、城壁線の全容と4カ所の水門及び2箇所⁽⁹⁾の城門を確認しており、この他にも空壕跡や望楼跡と称される城外側の平坦面が報告されている。版築土塁の形状は内托式で、平均的な規模は高さ約3m余り、上面幅は8.6m前後を測り、土塁の基底部に列石を配列し上部は版築盛土によって築造されている。

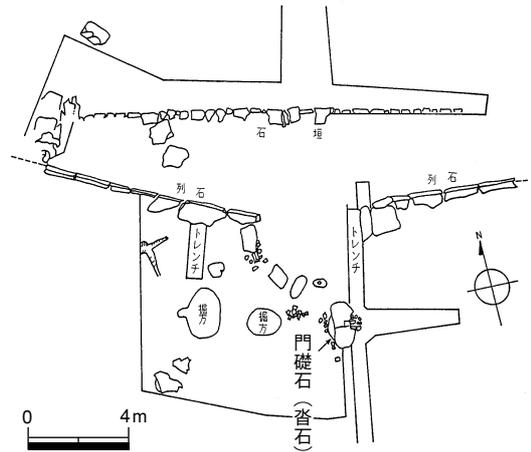
列石の前面には約1.3m内外の間隔で柱穴を検出されており、柱穴や列石の勾配からみて壁面は70°～80°の勾配と推測され、土層断面図によれば列石は版築盛土により被覆されていたことがうかがえる。

こうした考古学上の成果と合わせ、版築土塁の列石や水門石垣などの構成要素として石材が多用されている事から、その供給源を探るべく城内の地質及び岩石の分布が把握されている。その優れた成果として岩石種には花崗閃緑岩を含む4種があり、「使用された岩石はその付近を構成する地質と極めて関連が深く、従って遠くから運搬されたものではなく、最も供給し易い場所のものが利用されたものである。」とされ、また、列石は「一般にその前面は自然の節理面が多く、上面や側面はかなり人工⁽¹⁰⁾が加わっている」と報告されている。このことは石材の調達⁽¹¹⁾が主に城域で実施されたことを意味し、一連の築城過程を知る上で、今なお斬新な切り口を提示しているものと思われる。

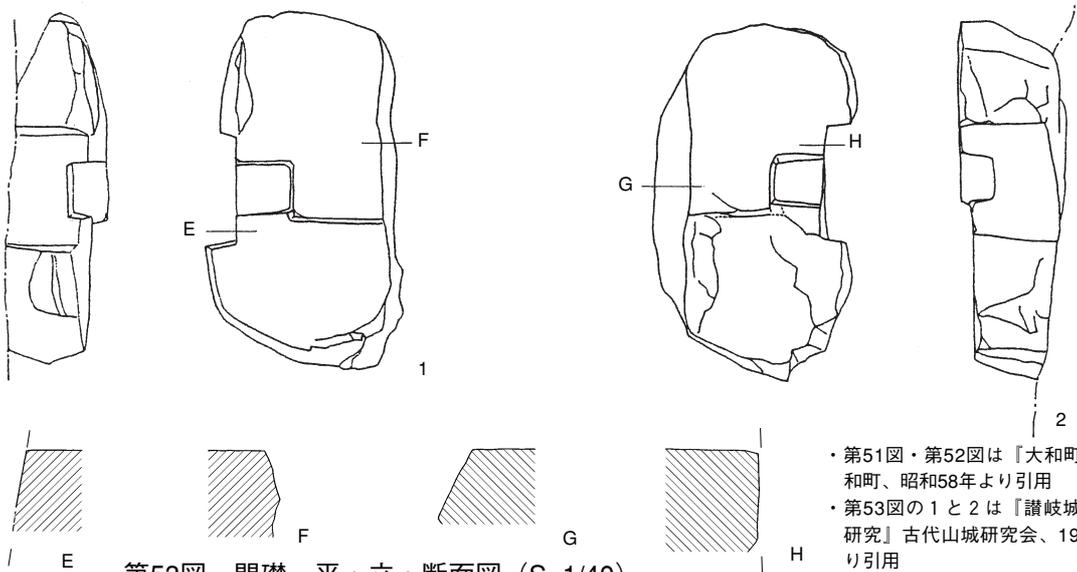
城門は北門と東門が判明している。今回はコ字形断面をもつ門礎が北門に所在するため北門について



第51図 石城山城平面図



第52図 北門平面図 (S=1/300)



第53図 門礎 平・立・断面図 (S=1/40)

・第51図・第52図は『大和町史』大和町、昭和58年より引用
 ・第53図の1と2は『讃岐城山城の研究』古代山城研究会、1996年より引用
 ・門礎の一部は許可を得て筆者作成



第30図版 北門跡

て述べたい。北門は石城山の北部である高日ヶ峯から北西へ派生する狭小な小尾根の基部に位置し、山麓の塩田方面との比高差は約235mである。北門の前面は谷部であり、城外からみて城壁線は必然的にハ字形に開いている。高低からみた北門の位置は急傾斜で下降する東側の城壁から、北門を扶んで西側の城壁に向け緩傾斜で移行し、北門がいわば傾斜変換地点になっている。

城門部分は列石が幅4mでとぎれL字形に屈折しているが、両脇の版築土塁の掘削を含め長さ23m、幅12mの範囲で大規模な地形の改変を受け、原状を留めていないと見られる。

杓石と称される門礎石は2石あり、1石は尾根上にすでに移動させられている。原位置を保持しているとされる門礎石からは、約60cm以上も地下げされており、何らかの事情で壊滅的な被害を受けたと観察される。昭和38年の第1次調査では北門の発掘調査が行われ、城門に関連するとされる掘形が2カ所検出されているが、不明な点も多いため以下に観察事項を整理しておきたい。

- 1、列石線がL字形に屈折するため、列石間の幅4mが門道幅を示すと考えられる。城内から城外をみて左側の列石は、通常の列石と上端を合わせず横長に立てており、門道側の側面をL字形に加工するなど、明らかに門道を意識した配置となっている。右側の列石も通常の列石とは異なる配置である。
- 2、不動とされる門礎が、列石から4.6m離れた城内側に位置し、古代山城の城門では通有の位置関係と言えるが、門礎の上端が門道床面の高さで復元すれば、城壁の裾にあたる列石との高低差が1m以上も段差がつくことになる。
- 3、杓石のコ字形刳形から城門は一辺60cm以内の角柱を用いた掘立柱建物と考えられるが、当然のことながら柱の大きさに見合う門柱の深い根入れが想定される。発掘調査では城門に伴うとされる掘形を2カ所検出し、西端の掘形に1の門礎を比定しているが、詳細が不明なため解釈に苦しむ。むしろ、門道幅を示す列石との関係から、中間の掘形に門礎の位置を求めるべきではなかろうか。
- 4、城門前面の約4mの位置には、東西方向に長さ約15m、高さ0.8m程度の石垣が築かれている。しかし石垣の石材は列石や、水門石垣に較べかなり小型であり明確な相異が認められ、古代山城期の遺構として扱うべきか判断しかねる。しかし、西水門では谷部の地盤補強を兼ねて3段からなる水門石垣が構築されており、谷部への補強という観点からは共通の手法として理解もできる。

北門の門礎は2石あり、古代山城研究会により実測⁽¹²⁾が行われている。門礎にはコ字形刳形、方立、蹴放しのセットが加工されており、播磨城山城と同様に軸摺穴が加工されていない。いずれの方立も深さ18cmと深く、蹴放しは6～8cmの段となるよう平滑に加工されていた。

尾根上に引き上げられた1の門礎は全長1.9m、幅1mを測る隅丸方形でコ字形刳形の長辺は60cm、側面は上端から下端にかけて幅が2cm程度ひろがる。刳形の断面は約8～10°外傾していた。側面は接合面を部分的に加工しており、そのほかは自然面を多く残している。

不動とされる2の門礎は全長1.9m、幅1mの隅丸方形で、1とは形状が類似している。コ字形刳形の長辺は60cmを測り、刳形の側面は上端から下端にかけて約7cm広がる傾向があり、刳形の断面は直角に加工されていた。門礎の接合面は部分的に加工が施され下端は30°外傾している。蹴放しが加工された石材は未発見であるが、門礎の側面形状と加工から3石以上の石材で構成されていたと考えられる。

昭和38年の調査では城門の確認が目的であったため、調査自体も最小限に留まざるをえなかった思われ、こうした先学の基礎調査を土台としてさらなる調査研究の進展を待ちたい。⁽¹³⁾

(3) 讃岐 城山城

城山城は香川県坂出市に所在し、令制下では讃岐国阿野郡に属する。城山城からは東・北・西の各方向に瀬戸内海が見渡せ、現在の海岸線までは直線距離にして約4kmで達し、眺望は距離感を感じさせないほどの臨海性がある。

鬼ノ城からは瀬戸内海を挟んで城山城と屋嶋城を見通すことができるが、瀬戸内海への可視性という点では互いに児島半島に遮られるため、自ずと海域に区分が生じる。すなわち鬼ノ城からはかつての吉備穴海から水島灘を望み、その一方、城山城からは内海の幅が7～12kmと狭くなる備讃瀬戸を眼下に収めて、互いに死角となる海域をカバーしている。また、城山城は独立山塊の高所に築城された山城であり、瀬戸内海航路をより遠く見渡せることも城山城のもつ特性と思われる。こうした海路への可視性と共に、城山の南麓には南海道が通じ河内駅比定地とも至近である。

城山は標高462mの独立山塊で、頂部はなだらかな高原状を呈し、四囲は急峻な斜面となっている。主峰をなす尾根は、まず北東から南西にかけて尾根がのび、やがて鞍部をはさんで郷獅山（標高296m）に至り。いま一つは通称「一本松」から北西に向けて延びる尾根が、途中で北へ転じつつも「ササキ原」に至る。また、頂部から北西側には標高394mの支峯が南北に延びているため、2カ所に大規模な谷が入り込んでいる。こうした城山の頂部は東西・南北とも約4kmと広大な規模を有する。

城山城は近年、古代山城研究会⁽¹⁴⁾や坂出市教育委員会の調査⁽¹⁵⁾により、城壁線とその形状について把握されており、以下に概要を記しておきたい。

城山城の城壁線は2重に巡らされた複郭であり、外郭（第2車道）と内郭（第1車道）に分かれる。外郭は全周4.2kmに推定され、高さ約1m、幅3～3.5mの規模を有する土塁が自然地形の急崖を利用しながら構築されている。内郭は全周約3.5kmを測り、折れを持った石塁を主体として土塁が伴い、その規模は高さ1.5～2m、幅6～7.5m、壁面の勾配は約70°である。なお、内郭と外郭ともに内托式である。

1998年に坂出市教育委員会の調査により水門の調査が実施され、石塁と土塁の接続状況が明らかになった。土塁の基底部には石面幅50cm程度の列石を配置し、上部には粘質土や粗礫層で構成される盛土が検出されている。

城門は内郭の北側に所在し、壁面には石垣が構築されており、石垣間の門道幅は4.4mを測る。城門の詳細は不明ながら、城山山麓の白峯神社裏に設置されている「マナイタ石」が、大正7年に城門から移転されたと伝えられており、わずかに門礎の状況がうかがえる。⁽¹⁶⁾

こうした門礎に関連する3種類の石製遺物が、現在13石確認されている。地元ではコ字形割り形が加工された石材をホロソ石と呼び、扁平に加工された長方形の石材を鏡石、そして蹴放しが加工されたものをマナイタ石と称され、いずれも城壁線の位置とは関連性がない。各個の石材については、『讃岐城山城跡の研究』⁽¹⁴⁾に詳述されているため、観察事項の3点を以下に述べておきたい。

まず、第1に城門から移転されたマナイタ石に注目してみたい。マナイタ石は長さ2.5m×幅1.1mを測る長方形で、上面には約8cmの段となる蹴放しが直線的に加工されており、未発見ながらセットとなる門礎にも蹴放しが加工されているものと予想される。側面加工は他の門礎石との接合面はもとより全ての面を端正に加工し、城内側となる側面を凸字形に整形している。凸字形のコーナー部分に

はノミ痕が顕著に残り、他の床石の組み合わせを考慮して、入念に加工したものであろう。

第2にホロソ石の形状は、上面と側面に加工が施され、かなり規格的に製作されている。コ字形剝形も長辺が47～53cmと類似する傾向があり、50cm近い角柱の使用を想定したものと思われる。コ字形剝形の断面は、門礎の上端からみて外傾、内傾、直角という具合に実に多様で、いかなる組み合わせを想定していたのかは不明である。

未製品とされるサルブチ滝所在の「ホロソ石」は長さ1.2mを測る方形で、上面には長辺が44cm、深さは3～10cmを測るコ字形の加工痕が途中で残されている。ホロソ石の上面や側面は加工が施されておらず、自然面を多く残しているように見受けられるのであるが、この安山岩には無数の細かい節理が観察され、加工調整に耐えられず放置されたものと考えられる。また、近傍には類似する大きさの石材が散在している状況からみて、製作現場を彷彿とさせる。

第3にササキ原地区や一本松地区では、複数の石製遺物が残されている。これらの石材がどのような理由で、残されたのかは不明であるが、各所から石材の採集、粗割り、整形、加工調整を経て集合された姿が、そこにあるとは言えないだろうか。

城山城に残る門礎からは、石材の形状や規格性、そして側面加工の痕跡から門道床面の配置計画が事前にあることをうかがわせ、切石仕立てとすることで門礎石と他の床石を極めて密に接面することを企図していたものと観察される。

4、まとめ

鬼ノ城では城門の発掘調査により、建物の形状や規模の詳細が判明し、今回は門道の石敷と門礎について着目して、その特徴をのべてきた。城門は門道と構造的に一体であるため、門道の石敷きには壁面の位置が反映され、城門構築上の一つの基準として、門礎の配置が重要な役割を果たしている。それゆえに門礎のもつ情報量は多く、鬼ノ城の門道床面に現れた門礎と床石の組み合わせ、そして門礎の側面加工や剝形形の断面形に主眼をおき、他の古代山城の門礎と比較してみた。

播磨城山城と讃岐城山城の門礎は、側面加工が顕著であることから、門道の床面が石敷きの可能性を指摘した。コ字形剝形の断面形については、播磨城山城の門礎が内傾しつつも微妙な傾きに留まり、鬼ノ城の西門や南門の門礎と同じ傾向が認められたが、石城山城では北門に所在する2の断面がほぼ直角に加工されているのに対し、移動させられた1の門礎は著しく外傾していた。こうした断面形状が単なる偶然ではなく、柱にそわせる際の何らかの配置方法を反映している可能性もあり、今後注意しておきたい。⁽¹⁸⁾

讃岐城山城の場合は、城門に伴う門礎が不明であるため確たることは言えないが、各所に散在するホロソ石はコ字形剝形の断面が直角、内傾、外傾という具合に実に様々であり、門礎の組み合わせや位置関係については課題を残している。

鬼ノ城の門礎は門道幅に見合う複数の石材を用いて構成され、しかも密に接合させていることや、水平に配置されている状況が具に見て取れる。そのため蹴放しのように数石にまたがる直線的な加工は、おのおの別個に製作し、現場であてがうのは困難であり、門礎を配置したのちに方立、軸摺穴、蹴放しを加工したと考えられる。また、門道の床面が門礎に合わせて高さを揃えている状況から、門礎の配置が何よりも優先されたことを指摘しておきたい。

こうした属性がどの程度他の古代山城の門礎に反映されているのかは、将来の発掘調査にゆだねる

として、城門と門礎をより総合的に解釈して実態が明らかになると思われる。

- 註1 向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝漕』第9・10合併号 古代山城研究会 2001
- 註2 この際、門礎の下端には柱側にあて木をかませ、門柱に刳形を添わせ傾けた状態で模式図Cへ移行させた可能性もある。
- 註3 左側門礎付近で検出された城門構築用の掘形は、南側へ約1.3m広がっており不自然な形状を留めている。こうした広がりには門道石敷の配置時の作業空間と関連があるのかもしれない。
- 註4 門礎を構成する石材は、隣石との接合面が密着できるよう切石加工されており、門柱にコ字形刳形を添わせている。見方を変えれば門の開閉機能のみならず、門柱間に寸分の狂いもなくはめ込む事により、門柱をゆるぎなく固定させているようにも見える。
- 註5 新宮町文化財調査報告10『城山城』新宮町教育委員会 1988年
- 註6 狩野久氏によれば和銅6年(713年)に分国された美作国の成立事情を、美作路建設の遅滞に原因があったと述べられ、これをうけて安川氏は和銅6年には駅路がそれなりに完成していたことを指摘している。
『岡山県の歴史』山川出版社、2000年
安川豊史「美作国」『日本古代道路辞典』八木書店 2004年
- 註7 義則敏彦氏により赤松氏供養碑の付近に、内托式から夾築式へ移行する土塁の残痕があることを現地にて御教示頂いた。
- 註8 細部ではあるが門礎1・2の蹴放しの直下にはノミ痕が顕著にみられ、加工された下段の平坦面よりもわずかに深くなっていた。こうした加工痕跡は鬼ノ城の西門や東門と同様である。
- 註9 向井氏によれば空壕跡は高日ヶ岳頂部に築城された中世城郭との関連を指摘しており、4カ所の望楼推定地は城壁線を尾根の先端部まで取り込まず、いわば段を設ける事によって防御の縦深性を強化させた防御形態と評価されている。
向井一雄「石城山城の空壕」『戦乱の空間』第2号 戦乱の空間編集会 2003年
- 註10 『大和町史』、大和町、昭和58年
- 註11 東水門の背面には切り立った岩盤が残されており、筆者は城壁構築に伴う露岩掘削の痕跡と理解している。
- 註12 溝漕第6号『讃岐城山城跡の研究』古代山城研究会 1996年
- 註13 石城山の城内建物は未発見であるが、防長2国の天平6、9、10年の正税帳から稲穀や糶の大規模な備蓄が石城山城と関係することが指摘されている。古代山城の備蓄物が文献史料や木簡から窺える例としては天智9年(670)に高安城に穀と塩を収める記事があり、大宰府不丁官衙地区の発掘調査で出土した基肄城関係の木簡は、天平年間の前半と考えられており、筑前・肥後・肥などの国に稲穀を班給している事が記されている。天安2年(858)には鞠智城内の倉庫に不動倉が存在したことや、貞観18年(876)に大野城で糧米を城庫に収める記事が認められる。内容物の性格やその運用方法は別として稲穀、塩が記事の中心であることが判る。
その中でも糶は石城山城の時期や軍団との関係でさらに検討すべき課題もあるが、軍用携帯食料の備蓄として極めて示唆に富む。
中西康裕「律令制下の西瀬戸内海地域—周防・長門国正税帳を中心に—」『古代王権と交流6、瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版 1995年
- 註14 12と同じ
- 註15 『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成10年度国庫補助事業 坂出市教育委員会 1999年
- 註16 門道の両側に築かれた隅角部には切石の安山岩を用いて算木積みとなっている。鬼ノ城の石垣にも算木積みの認められる箇所がある。
- 註17 蹴放しの直下には幅約6～8cmの範囲でわずかに深くなっている。
- 註18 鬼ノ城の東門では、円形刳形を施した門礎の断面が内傾し、門礎を配置する際の工夫と考えたが、この場合は門礎は2石で構成され、石城山城北門の杓石とは状況が異なる。